

都祁氷室に関する一考察

川 村 和 正

都祁氷室に関する一考察

川村 和正

要旨 古来、都祁といえは『日本書紀』仁徳天皇62年条の關鷄氷室説話を思い起こさせるが、古代都祁郷に比定される天理市福住町には往古から氷室神社や伝氷室跡など氷室史跡が在る。近年、同町内や都祁郷本地の都祁村で伝氷室跡類似の大型穴が発見され、さらに発掘調査による氷室と推定される円形摺鉢状遺構の出土が報告されだした。これら氷室跡とおぼしい各種氷室遺構の分布状況を検討究明し、木簡を含む関係史料や文献と突き合わせ、都祁氷室の様相並びに推移を解明しようと試みた。

なお、本稿は、本学国史学専攻2002年度卒業論文『古代氷室制度に関する一考察—都祁氷室を中心に—』より都祁氷室に関する事項をまとめたものである。

キーワード：氷室、円形有段遺構、主水司

はじめに

21世紀を迎えた今日、氷や冷凍食品は極めて身近なもので、現代人は野菜・魚・肉類の保存・輸送に際し冷蔵・冷凍技術の発達により水や空気と同じく日常生活に恩恵を受けている。氷利用の起源は、日本では『日本書紀』仁徳天皇62年条の關鷄の氷室説話が濫觴とされる。この氷室説話に登場する關鷄は都祁、都介とも書き、近年、長屋王家発掘調査で都祁氷室木簡が出土したことで、都祁氷室への関心が高まった。また、奈良県山辺郡都祁村内で氷室と推定される遺構が発掘された。さらに、氷室神社や伝氷室跡がある奈良県天理市福住町や古代都祁郷中心地の都祁村で類似の摺鉢状をした大型穴が多数発見された。このような類例は宇陀や京都市西賀茂でも知られ、関東地方で氷室の可能性のある円形有段遺構が多数出土しており、各種氷室遺構が報告されだした。

本稿は、これら氷室関係知見を抽出し、都祁地域の各種氷室遺構を中心に都祁氷室の様相や変遷などを追い、古代氷室制度のあり方を考えたい。

1. 都祁氷室に関する先学研究について

都祁氷室は『日本書紀』（以下、『紀』と略称する）の關鷄氷室や、『延喜式』主水司式（以下、主水司式と略称する）の都介氷室で知られ、奥野高広氏の諸司領研究や⁽¹⁾、大西源一氏の氷室研究で⁽²⁾、古代の主要氷室として取り上げられた。滝川政次郎氏は都祁紀行文において主水司式、『元要記』氷室社条などを検討し都祁氷室・氷室神社や平城（奈良）氷室神社を考証した⁽³⁾。

はじめて都祁氷室をテーマとして、そのあり方を分析検討されたのが井上薫氏であった。井上氏は都祁氷室と都祁地方の関係を詳細に考察し、以後の古代氷室制度研究の指針となった⁽⁴⁾。最近、高橋和

まとめたのが図1、表1である。

室山群は氷室神社と対をなす氷室跡として知られるが、近世中期の地誌『大和志』は都介氷室を山田村（現天理市山田町）に比定するので、近年まで氷室神社ほど意識されていなかったようである⁽¹¹⁾。

前述のごとく、この室山群を実測調査し学会で紹介されたのが井上薫氏で、以後、広く認識を得るようになった⁽¹²⁾（図2）。室山群は北西から派生する二つの丘陵尾根に3基ずつ分布しており、南西側の尾根の3基をA支群（No1～3）、北東側の尾根の3基をB支群（No4～6）とした。往古の氷池と伝わる茅荻池伝承地が二つの丘陵の谷合にあり、ここで採れた氷を両サイドの氷室に収納したと想定される。

さて、1993年頃、同町西端部開発時発見された氷室状大型穴が池ノ内群（No7～9）で、その後の踏査により奉書谷群・尾広群（No10～No16）が見つかった。さらに、町の東端で都祁村との境の小野味地区に残るのが小野味群（No17～21）で、5基の氷室状大型穴が確認された。これら、新たな氷室状大型穴の分布する地域は、氷室神社宮座の丹生田座に関係する地域であり、当地の氷室伝承との関連で氷室跡の可能性が考えられる⁽¹³⁾。

以上、同町東西約3kmの範囲に確認できた氷室状大型穴は20数基を数える。これらは町の西端、中心、東端にまとまりを持ち、全て水田を臨む丘陵地域に分布している。特筆できるのは、3基1グループで構成されるものが多いことである。また、全てのグループが布目川支流の水源地や分水嶺付近の水田を臨む丘陵地帯に分布するのも特徴である。

（2）都祁村の各種推定氷室遺構

都祁村は福住町の東南に位置し、古代都祁郷の中心地にあたる地域であるが、具体的に氷室設営を伺わせる史料、伝承、史跡が無く古代氷室との関係は不明であった。その都祁村蘭生所在の葛神社裏山に氷室状大型穴が残ることを確認されたのが井上薫氏であった⁽¹⁴⁾。その後、村内に氷室と推定される遺構が発見・発掘され、地域単位にまとめたのが図3、表2である。

蘭生群（No1～5、図4）は蘭生の葛神社周辺の丘陵麓にあり、既報告のもの1基と1999年の踏査で発見した4基である⁽¹⁵⁾。上部径が約8m～約10mの規模を有するものが多いこと、3基1グループにまとまるものがあることなど福住町の氷室状大型穴に類似する。また、蘭生群は布目川上流の水源地周辺の水田を近くに控える丘陵麓に分布する点も福住町の立地と同じくする。

ゼニヤクボ群（No6～9、図5）はゼニヤクボ遺跡第6・7次発掘調査で検出された遺構4基で、これら大型の摺鉢状土坑は、法面には覆屋の柱穴とみられるピットもあり、発掘担当者が氷室跡と推定される⁽¹⁶⁾。トノシ遺跡の推定氷室遺構（No10、図6）は、1991年に発掘された上部径約4.9m～約5.3m、深さ約2.6mの円形遺構である⁽¹⁷⁾。遺構断面が摺鉢状を呈し、底部にもう一段直径約0.9m、深さ約0.4mのピットが設けられ、形状は円形有段状を呈す。土坑の性格は、福住町の室山群の立地や形態に類似することから氷室と見られる⁽¹⁸⁾。なお、類例は中山晋氏により栃木県を主に関東で多数抽出された円形有段遺構にみられ、氷室の可能性を提起されている。中山氏は栃木県下で検出された性格不明の円形有段遺構に注目し、底部土壌の理科学分析を行い、基底部分から検出された水性珪藻を氷溶解物と推考され、小穴の用途が排水を目的として古代氷室の可能性が高いとされた⁽¹⁹⁾（図7）。円形有段遺

構は氷室の原形を知る上で貴重な資料であり、古代氷室の実態究明を進める上で重要な遺構である。

以上、古代都祁郷に比定される福住町及び都祁村の各種推定氷室遺構を抽出した。中でも、氷室状大型穴は、なんらかの規則性を持って分布していることが伺え、古代氷室を解明するにあたり重要な資料と考えられる。

3. 他地域の氷室状大型穴について

氷室状大型穴と古代氷室の関係を検証するため、他地域の類例の分布状況や立地などを見ておきたい。

(1) 宇陀の氷室状大型穴

宇陀と氷室の関わりは、『古事記』神武記に「宇陀水取等之祖」、『紀』神武紀2年春2月条に「菟田主水部遠祖」と記す猛田県主に派生し、宇陀が水取（主水）部の発生の地で古代氷室のルーツとされる。宇陀の氷室伝承は近世の『大和名所記』宇陀郡項の氷室条⁽²⁰⁾、『大和志』宇陀郡項⁽²¹⁾、及び近・現代の『奈良県宇陀郡史料』⁽²²⁾、『改訂大宇陀町史』⁽²³⁾などに記され、宇陀の水取部の伝統を伺わせる。

宇陀の氷室状大型穴は宇陀郡菟田野町松井の天神社周辺の標高約390mの丘陵地帯にあり、松井群としてまとめたのが図8、表3である。A支群は天神社の裏山の7基（No1～7）で、3基単位にまとまるものが2グループあるのが特徴である。B支は西側の称名寺裏山の6基（No8～13）で、単独で分布するのがA支群との相違点である。

なお、当群が芳野川に注ぐ谷川沿いの水田地帯を臨む丘陵中腹に分布することは都祁地域に類似する。

(2) 京都市西賀茂の氷室状大型穴

京都市北区西賀茂氷室町は鷹ヶ峯北方約5kmの標高約380mの山間部に所在し、主水司式の栗栖野氷室に比定される。当地には氷室神社と氷室状大型穴3基が残っており、西賀茂群と仮称してまとめたのが図9である。これらの氷室関係史跡についての研究は、竹村俊則氏の京都北山紀行文や⁽²⁴⁾、北田栄造氏の栗栖野氷室の論考が知られる⁽²⁵⁾。なお、最近、屋木英雄氏は西賀茂氷室の氷室関係史跡について鶴原氷室比定説を提起されている⁽²⁶⁾。

西賀茂群は上部径が約6～7mと小型であるが、3基が三角形にまとまり（No1～3、図10、表4）、都祁地域の分布状況と共通する。しかも、本群は水田から近距離の山麓にあり、氷室神社と関係することなど、福住町と類似点が多く古代氷室解明に重要な遺構である。

4. 氷室状大型穴と氷池・氷室の関係について

このように都祁地域、宇陀、京都市西賀茂などに残る氷室状大型穴は、普遍的に存在する性格のものでなく、極めて特殊な遺構と言え、各地の氷室状大型穴の分布状況、立地、環境を整理し、古代氷室との関係を検討したい。

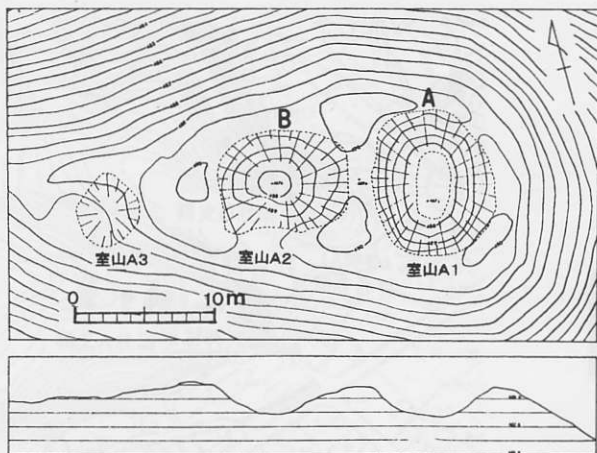


図2 室山A支群実測図



図4 蘭生群水室状大型穴分布図



図3 都祁村各種推定水室遺構分布図

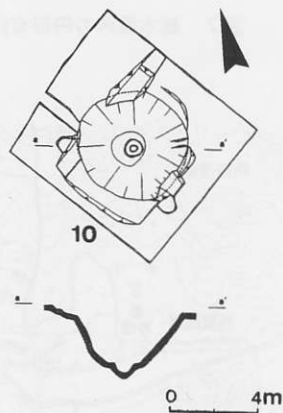


図6 トノニシ遺跡推定水室遺構

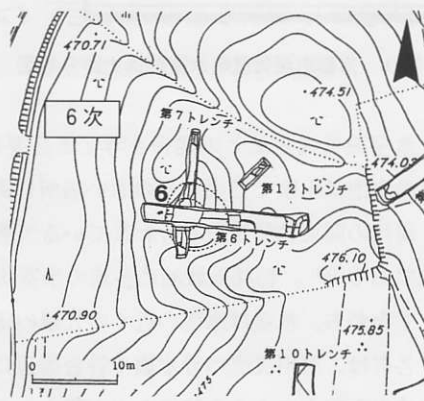
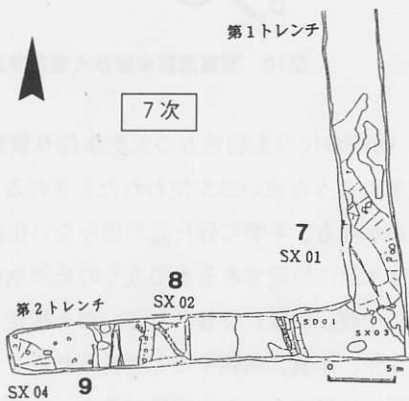


図5 ゼニヤクボ群推定水室遺構

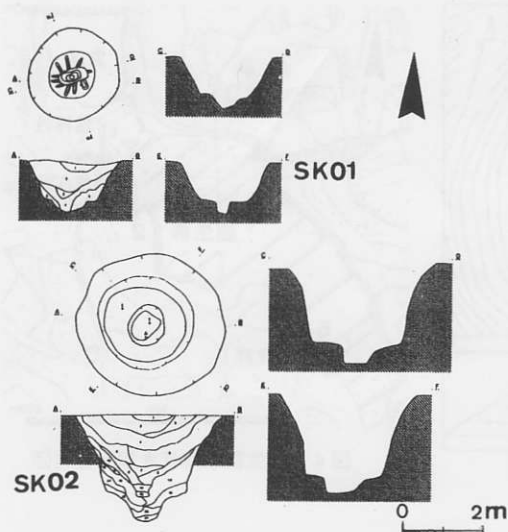


図7 栃木県内の円形有段遺構例



図8 菟田野町松井氷室状大型穴分布図

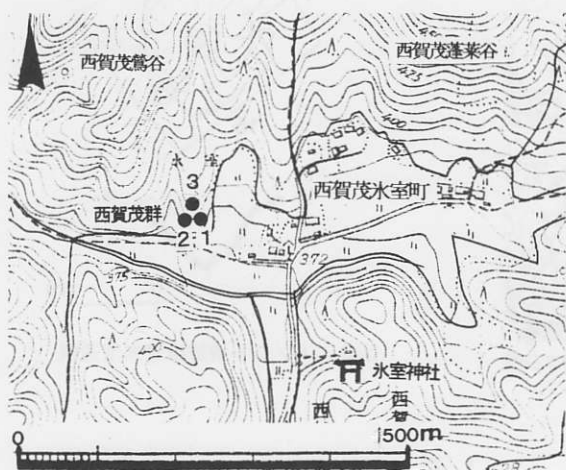


図9 京都市西賀茂町氷室関係史跡分布図

本図スケール1500mは500mの誤植につき正誤表参照

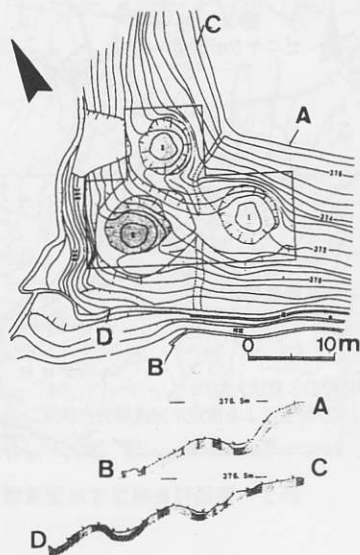


図10 西賀茂群氷室状大型穴実測図

まず、氷室設営は水池との関係を考える必要がある。明治時代の生駒地方の天然氷作り資料によると、当時の水池は山陰で日当たりの悪い場所にあり、水田のような浅い池が使われたとされる⁽²⁷⁾。ちなみに、現代の関東秩父地方で行われている天然氷作りの水池も、冬季に終日陽の当たらない山陰の浅い方形の池である⁽²⁸⁾。都祁地域始め各地の氷室状大型穴は水池に想定できる水田近くの丘陵地に分布している。すなわち、氷室は水池の近くの丘陵の尾根頂部、中腹、山麓に設営されていたと推定される。さらに、各群は、河川支流の分水嶺や谷合周辺に分布するが、水質に関係すると考えられる。つまり、水池は岩清水や谷水のような清浄な水が得られる谷や沢近くに設けられたと類推できる。その典型例は福住町の室山群と谷合の茅荻池伝承地のセット関係に見られる。

また、各群の氷室状大型穴は丘陵地帯に分布する。中世後期の史料『実隆公記』永正6年(1509)3月11・14日条⁽²⁹⁾に、氷室の周囲の材が切取られたため、氷が溶け出したという記述がある。このことは、氷室には光や雨・風からさえぎる樹木が必要なことを示すので、氷室は山中に設けられていたことが伺える。さらに、歴史地理学的見地から福住町の室山を調査された相馬秀広氏は、同町周辺に分布する花崗岩の風化したマサという掘り易く水はけの良い土壌も氷室設営に重要と指摘される⁽³⁰⁾。

なお、各群は都祁、宇陀、京都西賀茂など古代氷室伝承地に分布することも共通し、古代宮都周辺地域の標高380m以上の山間部で冬季寒冷激しい地域である。しかも、各地とも氷を迅速、かつ、古代宮都へ運べる位置的環境に適合する地域と言える。以上、各要件を総合して氷室状大型穴は古代の氷室跡の可能性が高いと思われる。

5. 古代氷室史料と都祁地域の各種氷室遺構との関係検討

(1) 『紀』仁徳天皇62年是歳条 關鷄氷室説話

「是歳 額田大中彦皇子獵于關鷄 時皇子自山上望之 瞻野中有物 其形如廬 仍件使者令視還來之曰窟也 因喚關鷄稻置大山主 問之曰 有其野中者何 睿矣 啓之曰 氷室也 (後略)」

古来、氷室といえば、關鷄或いは都祁・都介氷室が連想されるのは、本条文によるといって過言ではなく、古代氷室研究の原点と言える。客観的にみて、都祁に氷室が設営された年代が仁徳朝に遡ることは史実と思えないが、『紀』に採録されたことから、『紀』編纂時に關鷄氷室に関する伝承が存在したことは否定できない。また、その背景として、8世紀前後の主水司所管の主要氷室は、都祁氷室であった可能性が高く、7世紀末～8世紀初頭の都祁郷に氷室が設けられていたとしても矛盾しない。仮説的ではあるが、都祁村吐山のトノニシ遺跡の推定氷室遺構は距離的に飛鳥・藤原宮への進水が考えられ、藪生群、ゼニヤクボ群も関係する可能性が生じる。

(2) 『養老令』職員令主水司条

「樽水 主水司 正一人 掌饘 粥 及氷室事 佑一人 令 史一人 水部册人 使部十人 直丁一人 駙使丁廿人 氷戸」

本条文は宮内省主水司の氷室管理の職掌や員数を規定するが、氷室管理の詳細や具体的な所在地が記されない。しかし、平城京との距離関係を考えると、都祁氷室が奈良時代の主力氷室であったと思われる。その具体的な場所は不明であるが、範囲は都祁村、天理市福住町、同市山田町域が推定される。

(3) 平城京出土の氷室関係木簡

1) 長屋王家出土都祁氷室木簡(史料1)

1988年、長屋王家発掘調査時に出土した都祁氷室関係木簡(以下、都祁氷室木簡と略称する)3点(1号木簡から3号木簡と仮称)は、奈良時代初頭の氷室経営の状況を記す古代氷室研究の貴重な資料であることは周知される。

1号木簡は表面に「都祁氷室二具、深各一丈(約3m)、廻各六丈(円周約18m=径約5.7m)」と

① 氷池の祭祀

氷池神十九座祭

座別五色薄繩各五寸。木綿一兩。麻二兩。米。酒各一升。鯨。堅魚各五兩。腊十一兩。海藻。凝海菜各五兩。鹽五

合。柑一口。

右每年十一月祭之。

氷池風神九所祭山城國五所。大和國一所。河内國一所。近江國一所。丹波國一所。

所別五色薄繩各一尺。米一升。酒二升。海藻一斤。雜魚二斤。祝詞料商布一段。

右若有年溫。氷薄。隨卽祭之。尋常寒歲不在此限例。

② 氷馬役

凡運氷駄者。以僂丁充之。山城國葛野郡德岡氷室一所一丁輪。愛宕郡小野一所一丁輪。栗栖野一所一丁輪。土坂一所一丁輪。賢アヲサカ(遠志)

木原一所並二丁輪。同郡石前一所一丁輪。大和國山邊郡都介一所六丁輪。河内國讚良郡讚良一所四丁輪。近

江國志賀郡部花一所三丁輪。丹波國桑田郡池邊一所五丁輪。牽駄丁給食。一人日米四合。鹽五撮。駄別秣稻

二把。捻計所須。每年申省請受。氷標シシシ。幡十二流各長二尺。料緋帛八尺二尺三年一請。料六尺練料。

③ 氷室雜用料

氷刀子十二枚。釘廿一口已上。鋏五十六口掃氷。池料。砥一顆已上三。氷室廿一所山城十室大半。大和二室半。河内二室。近江二室小半。丹波三室半。。以見

役僂丁内。隨損修之。其收氷夫。室別一百册人。給間食。人別日米一升四合飯料四合。糟料一升。

僂丁七百九十六人半山城四百十四人半。大和百人半。河内七十五人。近江八十八人。丹波百十八人半。。散百七十五人半。副丁在之中長六十七人半。執纜五十

役六百廿一人山城三百十六人半。大和八十一人。河内五十五人半。近江六十九人。丹波九十九人。。氷池五百册處山城二百九十六處。大和卅處。河内五十八處。近江六十六處。丹波九十處。

史料3 主水司式氷室關係条文

えられ、「大和国一所」は福住町の氷室神社とされる⁽³⁴⁾。このことから、都祁氷室は平安遷都後も都介氷室として継続していることが確認できる。

2) 氷馬役

「凡運氷駄者」以下は水輸送に僂丁を充てること、及び氷室の場所名、氷室別一駄あたりの僂丁数などが規定される。大和国都介氷室の「六丁輪一駄」が最多であるのは、各国氷室の中で、京都までの距離が最長であった証左である。

3) 氷室雜用料

本条文は氷室管理に関する実務的な規定であるが、具体的な内容や規模は理解し難い。例えば、氷室「廿一所」以下国別室数が記されるが、「室」の具体的な数値は不明である。ちなみに、井上薫氏は「大和二室半」が室山の氷室跡（本稿室山A支群1～3）に対比できるかもしれないと氷室跡と「室」との関係を考証される⁽³⁵⁾。

さて、大和都介氷室の規定を抽出すると、氷室2室半（全21室の11.9%）、係丁100人半（全796人半の12.6%）、見役81人（全621人の13%）と主水司所管氷室の約12%であるが、「氷池卅處」は5.5%（全540處）と少ない。氷室1室あたり氷池数においても、平均25.7處に比べて12處と少ないが、この理由は不明である。

なお、主水司の氷室は、氷室状大型穴の分布状況や円形有段遺構の構造から想定して、底部中央部に排水用の小穴を穿ち、断面が摺鉢状を呈する円形大型穴が丘陵地帯に設営され、単独或いは複数（3基単位か）のまとまりをもって展開していたと思われる。氷池の構造や規模は不明であるが、茅荻池伝承地や近現代の天然氷作り資料から、水田のような浅い氷池が用いられ、氷室の周囲に配置されていたと推定される。

また、前述のごとく、福住町の氷室神社が主水司式の「氷池風神大和国一所」に比定されるので、都介氷室は福住町内や周辺に設けられたと推察され、同町の西端部、室山、小野味の氷室状大型穴はその時期の遺構の可能性が考えられる。その中心は氷室神社近隣の室山群で、茅荻池伝承地も当時の氷池の蓋然性が高い。

6. 都祁氷室の様相と推移について

以上、都祁氷室に関する主要な史料や文献を抽出し、都祁地域の各種推定氷室遺構の実態解明を試みた。ここで、都祁氷室の様相と推移について、若干、検討しておきたい。

都祁氷室の上限が大化前代に遡るかは定かでは無いが、前述のごとく『紀』編纂時には存在した可能性は高いと思われる。一方、宇陀にも氷室伝承及び氷室状大型穴が残ることから、白鳳期頃までは、都祁と同じく氷室設営地のひとつであったことは否定できない。

しかし、平城遷都を契機に距離的に優位で、伝統ある都祁氷室が主力を占めることになったと思われる。都祁氷室木簡より、遷都直後、都祁に長屋王家の氷室が設けられたことが類推できるので、都祁には、主水司所管の氷室や王臣家の氷室が増設されていたことが窺える。前述のごとく、平城京との位置関係から、都祁における氷室増設地域は、福住町西端部が有力視される。その後、需要増に応じ、福住町中心の室山や小野味に広まったと想定される。また、『大和志』は都介氷室を山田町に比定することから、近世初頭まで氷室伝承があったと推定され⁽³⁶⁾、同町にも氷室が設営されていた可能性が考えられる。なお、都祁村蘭生やゼニヤクボなど都祁村南西部の氷室群からも福住町或いは、山田町経由の道程を使って平城京へ進水していたと考えられる。

平安遷都後、都祁氷室は距離的に氷輸送が極めて難しくなったと思われるが、何らかの方法でこれを克服して、主水司式に示されるごとく都介氷室として継続していることが判る。平安時代の都介氷室の範囲は、都祁村の各群は距離的に氷輸送が困難なため廃絶し、都祁地域西端部の福住町や北西部の山田町に限定されたと思われる。福住・山田両町の氷室の中核は、氷室神社近傍の室山群であったと類推さ

れる。

なお、平安時代後期の史料『朝野群載』康和3年(1101)「主水司解文」に「就中、大和国都介御室(氷室)、昔毎年厚封」と記すので⁽³⁷⁾、12世紀初頭においても都介氷室は重要視されていたことが伺え、平安時代を通じて主水司所管の主要氷室として取り扱われていたと言える。

その後の都祁氷室の推移を史料で追うと、『民経記』寛喜3年(1231)9月9日条に「主水司□大和国都介氷室勾頭職事」と勾頭職が置かれている⁽³⁸⁾。『康富記』嘉吉3年(1443)12月23日条に「主水領大和国都介氷室字福住と号ス」と記され⁽³⁹⁾、福住町内に限定されるが継続していることが確認できる。なお、『実隆公記』永正7年(1510)8月25日条「和州福隅氷室舞谷違乱事」を最後に史料が途絶え⁽⁴⁰⁾、16世紀初頭が下限であることが確認される。

このように、都祁氷室は8世紀初頭から16世紀初頭まで主水司関係氷室として活動したことが確認できる。福住町内に氷室状大型穴が多数残るのは、16世紀まで主水司所管の氷室として活動が継続していたこと、氷室神社や宮座氷室伝承などが近世を通じて現代にいたるまで存続したことが関係すると思われる。

おわりに

憶測を重ねる結果となったが、都祁地域の各種推定氷室遺構を軸に、都祁氷室関係史料、考古学的知見などを抽出し突き合せ、都祁氷室の様相及び推移を追い実態解明を試みた。まず、都祁地域の各種推定氷室遺構は確証に欠けるも古代氷室跡の可能性が高い。特に、福住町の氷室状大型穴は古代から中世まで継続して使われた氷室の可能性があり、都祁氷室成立解明のキーになるとと思われる。

しかし、資料が多岐にわたり、論旨が明確にできず、未解明の部分が多々残った。今後、円形有段遺構を含む氷室関係資料を収集し、都祁地域の各種推定氷室遺構との比較検討を進め、都祁氷室の実態にせまり、歴史的位置づけを明らかにすることが課題である。

単位：m

No.	グループ名	氷室状 大型穴名称	上部径		底部径		深さ	断面の 形状	No.	グループ名	氷室状 大型穴名称	上部径		底部径		深さ	断面の 形状
			東西	南北	東西	南北						東西	南北	東西	南北		
1	霊山A支群	霊山A1	8.4	10.6	2.5	4.9	2.67	楕円状	10	奉書谷A支群	奉書谷A1	約10.0	約12.0	約4.5	約4.8	約2.2	浅鉢状
2	〃	霊山A2	9.4	7.5	2.5	2.2	2.20	〃	11	〃	奉書谷A2	約7.0	約7.5	約2.1	約2.5	約1.5	〃
3	〃	霊山A3	約4.1	約4.4	約1.4	約1.8	約0.5	皿状	12	〃	奉書谷A3	約8.7	約8.5	約2.2	約2.0	約2.4	楕円状
4	霊山B支群	霊山B1	約11.0	約10.0	約2.8	約1.8	約2.0	楕円状	13	奉書谷B支群	奉書谷B1	約6.4	約6.4	約3.9	約3.3	約1.3	皿状
5	〃	霊山B2	約11.8	約11.3	約3.0	約2.5	約2.5	〃	14	〃	奉書谷B2	約8.7	約8.5	約5.3	約5.2	約2.4	〃
6	〃	霊山B3	約11.9	約12.8	約3.2	約3.2	約2.2	〃	15	〃	奉書谷B3	約8.7	約8.5	約5.3	約5.2	約2.4	〃
7	池ノ内群	池ノ内1	約7.5	約7.3			約1.6	〃	16	尾広群	尾広	約7.8	約7.5	約3.0	約3.0	約2.4	楕円状
8	〃	池ノ内2	約8.5	約7.4	約2.8	約2.9	約1.8	〃	17	小野味群	小野味1	約5.5	約7.5	約2.3	約3.0	約2.7	〃
9	〃	池ノ内3	約10.6	約8.4	約2.9	約2.2	約1.9	〃	18	〃	小野味2	約7.0	約9.3	約2.5	約3.3	約1.5	浅鉢状
									19	〃	小野味3	約7.6	約8.8	約3.0	約4.8	約1.1	〃
									20	〃	小野味4	約7.7	約5.4	約3.9	約3.8	約0.9	皿状
									21	〃	小野味5	約4.2	約3.8	約1.7	約1.7	約0.7	楕円状

表1 天理市福住町氷室大型穴一覧表

川村和正 「天理市福住町の氷室状大型穴踏査レポート」 1996年 一部改編

都祁氷室に関する一考察

単位：m

番号	グループ名	上部径		底部径		深さ	断面の形状
		東西	南北	東西	南北		
1	蘭生A支群	約7.9	約8.2	約2.0	約2.4	約2.0	摺鉢状
2	〃	〃 4.3	〃 4.2	〃 2.0		〃 0.9	浅鉢状
3	蘭生B支群	〃 9.1	〃 10.0	〃 2.2		〃 3.1	摺鉢状
4	〃	〃 6.5	〃 6.8	〃		〃 0.7~1.5	浅鉢状
5	〃	〃 8.1	〃 7.2	〃 2.0		〃 2.0	摺鉢状
6	ゼニヤクボ群	7.3~7.7		3.4~3.7		不明	摺鉢状土坑
7	〃	約8.0~7.0		不明	不明	約1.5	々
8	〃	約7.0		〃	〃	〃 1.0	々
9	〃	約6.0~7.0		〃	〃	〃 1.7	々
10	トノシ遺構	5.3~4.85		不明	不明	〃 2.6+0.4	円形有段遺構

表2 都祁村各種推定氷室遺構一覧表

川村和正 「都祁村蘭生の氷室状型穴の発見」 2000年 一部改編

単位：m

番号	グループ名	上部径		底部径		深さ	断面の形状
		東西	南北	東西	南北		
1	松井A支群	約10.5	約10.5	約2.5	約3.0	約1.5~2.0	摺鉢状
2	〃	〃 7.5	〃 8.0	〃 3.0	〃 3.5	〃 1.0	浅鉢状
3	〃	〃 4.0	〃 4.5	〃 1.5	〃 1.5	〃 0.5~0.8	皿状
4	〃	〃 6.5	〃 9.5	〃 2.5	〃 4.0	〃 0.8~1.0	浅鉢状
5	〃	〃 6.5	〃 6.5	〃 2.5	〃 2.8	〃 0.8	皿状
6	〃	〃 7.0	〃 6.5	〃 3.0	〃 3.5	〃 1.0	浅鉢状
7	〃	〃 4.0	〃 3.5	〃 2.0	〃 2.0	〃 0.5~0.8	皿状
8	松井B支群	〃 6.5	〃 5.5	不明	不明	不明	不明
9	〃	〃 5.3	〃 5.7	約1.0	不明	約 0.8	浅鉢状
10	〃	〃 8.0	〃 7.0	〃 2.4	約2.3	〃 1.2	〃
11	〃	〃 6.7	〃 6.4	不明	〃 2.0	〃 1.2	〃
12	〃	〃 7.7	〃 7.5	約2.4	不明	〃 0.9~1.3	〃
13	〃	〃 7.5	〃 7.5	不明	不明	不明	皿状

表3 菟田野町松井氷室状大型穴一覧表

川村和正 「宇陀の氷室状大型穴について」 2003年 一部改編

単位：m

番号	グループ名	上部径	底部径	深さ
1	西賀茂群	6.8×6.0	3.5×2.8	2.6
2	〃	6.5×6.0	3.0	2.2
3	〃	7.5×6.5	3.0	2.0

表4 西賀茂群氷室状大型穴一覧表

北村栄造 「氷室七景—京都市西賀茂の栗栖野氷室—」

1997年 一部加筆

〔付 記〕

これら氷室状大型穴の発見の経緯や情報入手、及び踏査・略測・分布図作成にあたりご支援・協力頂いた方々については以下の如くである。

天理市福住町池ノ内群…1992年、桜井市教育委員会清水真一氏、並びに天理市教育委員会松本洋明氏より発見情報を頂いた。

同 奉書谷群…1993年、同町在住元氷室神社宮司故森本藤雄氏が発見され案内して頂いた。

同 尾広群…1993年、同町在住岡田忠弘氏が発見され案内して頂いた。

同 小野味群…1993年、故森本藤雄氏より示唆を受け、岡田忠弘氏に調査を依頼しておいた。岡田氏は同町在住山下博昭氏のご協力を得て、かつ独自に本群5遺構を発見され案内して頂いた。

踏査・略測・分布図作成にあたり、岡田忠弘氏、同町在住吉田幸男氏、中西圭二氏、前田忠男氏、山下博昭氏、及び香芝市教育委員会山下隆次氏、奈良市在住小川朗氏、宇治市在住石橋忠昭氏、京都市在住杉山秀司氏のご支援・協力を仰いだ。

山辺郡郡祁村蘭生群 (No.2～5) …1999年、同村在住倉西格氏が発見され案内して頂いた。

踏査・略測・分布図作成にあたり、倉西格氏、同村在住吉井正継氏、故森田弘氏、天理市福住町在住岡田忠弘氏のご支援・協力を仰いだ。

宇陀郡菟田野町松井群…1997年、滋賀県立大学教授菅谷文則氏、当時シルクロード所属中井一夫氏の教示を受け、宇陀郡大宇陀町在住井岡和雄氏の協力を得てA支群を踏査した。

B支群は天理市福住町在住岡田忠弘氏が発見され案内して頂いた。

踏査・略測・分布図作成にあたり、岡田忠弘氏、井岡和雄氏のご支援・協力を仰いだ。

〔謝 辞〕

拙稿を纏めるにあたり、まずは論文指導を賜り、学恩を蒙った岡崎晋明先生に対し心底より御礼を申し上げます。さらに、多大なご指導・援助を賜り、いろいろ便宜を図って頂いた方々に対し末尾ながら記して感謝の意を表します。

(順不同・敬称略)

井上 薫、故森本藤雄、小泉俊夫、菅谷文則、和田 萃、中井一夫、清水真一、山下隆次、中山 晋、今尾文昭、林部 均、清水康二、松本洋明、植松宏益、坂元義種、松倉文比古、土屋和三、杉本 宏、西山良平、相馬秀廣、田中欣治、大宮守人、大宮守友、山上 豊、
渡辺晃宏、高橋和広、北田栄造、塩沢一平、浦西 勉、和泉 薫、奥田裕之、森本仙介、
屋木英雄、錦 吉見、桑野貢三、中島 満、阿左美哲男、吉新昌夫、細島雅代、岡田忠弘、吉田幸男、
中西圭二、前田忠男、山下博昭、榊 勉、植嶋 熙、植村勝弥、東森正太、
浦井善史、村上博美、米田政夫、東内 弘、片岡 博、倉西 格、吉井正継、故森田 弘、井岡和雄、
山崎剛一、坂上健一、小川 朗、石橋忠昭、杉山秀司

註

- 1 奥野高広「主水司領の研究」『国史学』第47・8号 55～57頁 1944年
- 2 大西源一「氷室考」『芸林』第12巻第1号 2～36頁 1961年
- 3 滝川政次郎「香落・都祁紀行(下)」『史迹と美術』449号 362～360頁 1974年
- 4 井上薫「都祁の水池と氷室」『ヒストリア』85号 1～30頁 1979年
- 5 高橋和弘「古代日本の氷室制度について—特に奈良時代における氷室制の再検討—」『山形大学史学論集』第12号 11～35頁 1992年
- 6 田中欣治「氷室」『講座考古地理学』第5巻 19～22頁 藤岡謙二郎編 学生社 1989年
- 7 中山晋「古代日本の「氷室」の実体—栃木県下の例を中心として—」『立正史学』第79号 43～68頁 1996年
- 8 井上薫 前掲4 3・4頁
- 9 井上薫 前掲4 15・16頁
- 10 川村和正「天理市福住町の氷室状大型穴踏査レポート」『かしこうけん友史』第3号 31～34頁 1996年
- 11 並河永校訂『大和志』 331頁「都介氷室在山田村(現天理市山田町)、隣村福住有氷室神祠」 臨川書店 1987年
- 12 井上薫 前掲4 16～18頁
- 13 氷室神社宮座は、丹生田座、宮中座、殿座の3座があり、古来、氷室神奉祀や氷室経営にかかわる伝承を持っている(森本藤雄「氷室神社史料」 165～166頁 氷室神社 1986年)。座の伝承からは丹生田座が最も往古からの氷室関係者で、氷室祭祀や経営に携わってきたことを伺わせる。池ノ内・奉書谷・尾広群が分布する一帯は入田・丹生田と称せられた地域である。丹生田座は入田地区の家系で構成されている。また、小野味地区も入田の分村と伝えられ、丹生田座に加入している家が多い。このことから、入田・小野味地域が氷室に何らかの形で関わったことを示していると思われる(川村和正 前掲10 33～34頁)。
- 14 井上薫 前掲4 18頁
- 15 川村和正「都祁村蘭生の氷室状型穴の発見」『冷凍』第75巻第872号 59～63頁 2000年
- 16 植松宏益「ゼニヤクボ遺跡第5・6次発掘調査」『平成5年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』66～69頁、奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会 1994年、植松宏益「ゼニヤクボ遺跡第7次発掘調査」『平成6年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』63～65頁 奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会 1995年
- 17 清水康二「都祁村吐山トノニシ遺跡」『奈良県発掘調査概報 1991年度』7・8頁 奈良県立橿原考古学研究所 1992年
- 18 清水康二 前掲17
- 19 中山晋 前掲7
- 20 池田末則他校注『大和名所記』奈良県史料第一巻 402頁 奈良県史料刊行会 1977年
- 21 並河永校訂 前掲11 230頁
- 22 『奈良県宇陀郡史料』 6・12・17・50頁 奈良県宇陀郡役所 1917年
- 23 伊達宗泰「古代氷室跡」『新訂大宇陀町史』55～57頁 大宇陀町史編集委員会 1992年
- 24 竹村俊則「北山水室紀行」『史迹と美術』235号 259～263頁 1953年
- 25 北田栄造『京都市の文化財—京都市指定・登録文化財—』第12集 26～28頁 京都市文化観光局文化部 1994年、北田栄造「氷室七景—京都市西賀茂の栗栖野氷室—」『古代文化』第48巻第3号 46～52頁 1996年
- 26 屋木英雄「鶴原氷室と鶴原寺—京都西賀茂氷室地区の氷室跡と寺院跡—」『京都考古』第91号 147～159頁 2003年
- 27 高田十郎「大和の「生駒水」」『大和志』第9巻第4号 115～120頁 1942年
- 28 細島雅代「阿左美家の天然氷」『全日空機内誌 翼の王国』No324 60～67頁 1996年
- 29 『実隆公記』巻5ノ上 174頁 永正6年(1509)3月11日条 続群書類従完成会 1980年、「(前略)氷室氷朔日以前可消之鉢也、山木伐儘之間、日影漏来之故也(後略)」、同 176頁 永正6年(1509)3月14日条「(前略)氷室事山木悉切取之間、氷至四月一日不可有之歟、剩為郡代所行一夜切落水入之間(後略)」
- 30 相馬秀広「氷室雑感」『奈良に関する文化地域学的研究 平成5年度奈良女子大学教育学内特別経費報告書』9～12頁 奈良女子大学 1993年
- 31 『続日本紀』和銅4年(711)には閏6月丙午条(『国史大系統日本紀前篇』 45頁 吉川弘文館 1997年)があるので、本木簡の閏月、閏6月は和銅4年と言える。
- 32 『平城宮木簡3 解説』 73頁 奈良国立文化財研究所 1981年
- 33 井上薫氏は福住町の氷室成立時期を都祁山之道開設以降と推定される(前掲4 18頁)。しかし、都祁氷室木簡は和銅4年(711)夏季に都祁から長屋王家へ頻りに進氷しているので、霊亀元年(715)の都祁山之道開設以前に直通ルー

トが存在したことが窺える。池ノ内群等氷室状大型穴の残る福住町西端部は都祁地域の中でも平城京に最も近い位置にあるので、井上説を奈良時代初頭に遡らせることが可能と考える。

- 34 滝川政次郎 前掲3 370頁
 35 井上薫「貝那木の水池と福住の氷室」『奈良県観光』第279号 2頁 奈良県観光新聞社 1980年
 36 『大和志』が都介氷室を山田村に比定する(前掲11)根拠は不明であるが、「山田村文禄検地帳写」に「ヒムロ」字名が記されるので(『改訂天理市史』史料編第4巻 453頁 天理市史編さん委員会 1979年)、山田町も都祁氷室の一部が設けられていた可能性があると言える。
 37 『新訂増補国史大系朝野群載』 220~222頁 吉川弘文館 1938年
 38 『大日本古記録 民経記』4 62頁 岩波書店 1985年
 39 『増補史料大成 康富記』1 405~406頁 臨川書店 1965年
 40 『実隆公記』巻5ノ下 405頁 続群書類従完成会 1980年

引用史料

5. 古代氷室史料と都祁村地域の各種氷室遺構との関係検討

- (1) 『紀』仁徳天皇62年 關鷄氷室説話
 『新訂増補国史大系日本書紀前篇』314頁 吉川弘文館 1977年
 (2) 養老令
 『新訂増補国史大系 令集解 第一』135頁 吉川弘文館 1977年
 (3) 平城京出土の氷室関係木簡
 ①長屋王家出土都祁氷室木簡
 『平城宮発掘調査出土木簡概報21—長屋王家木簡1—』12頁 奈良国立文化財研究所 1989年(一部訂正…『平城宮発掘調査出土木簡概報25—長屋王家木簡3—』26頁 奈良国立文化財研究所 1992年、及び『平城京木簡2』40頁 奈良国立文化財研究所2001年)
 ②主水司関係木簡
 『平城宮木簡3 解説』73頁 奈良国立文化財研究所 1981年
 (4) 『日本紀略』天長8年(831)8月20日条
 『新訂増補国史大系日本紀略前篇下』332頁 吉川弘文館 1965年
 (5) 主水司式氷室関係条文 ①氷池の祭祀 ②氷馬役 ③氷室雑用料
 『新訂増補国史大系延喜式後篇』896頁~901頁 吉川弘文館 1977年

図面 引用文献

- 図1 天理市福住町氷室状大型穴分布図
 川村和正「天理市福住町の氷室状大型穴踏査レポート」『かしこうけん友史』第3号 31頁 1996年 一部加筆
 図2 室山A支群実測図
 井上薫「都祁の水池と氷室」『ヒストリア』85号 17頁 1970年 一部加筆
 図3 都祁村各種氷室遺構分布図 自作
 図4 蘭生群氷室状大型穴分布図
 川村和正「都祁村蘭生の氷室状型穴の発見」『冷凍』第75巻第872号 60頁 一部改編
 図5 ゼニヤクボ群氷室遺構
 植松宏益「ゼニヤクボ遺跡第5・6次発掘調査」『平成5年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』69頁、奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会 1994年、植松宏益「ゼニヤクボ遺跡第7次発掘調査」『平成6年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』65頁 奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会 1995年
 図6 トノニシ遺跡氷室遺構
 清水康二「都祁村吐山トノニシ遺跡」『奈良県発掘調査概報 1991年度』8頁 奈良県立橿原考古学研究所 1992年 一部改編
 図7 栃木県内の円形有段遺構集成図
 中山晋「古代日本の「氷室」の実体—栃木県下の例を中心として—」『立正史学』第79号 53頁 1996年 上横田A遺跡SKO1・SKO2遺構図改編転載
 図8 菟田野町町松井氷室状大型穴分布図 自作

図9 京都市西賀茂町氷室関係史跡分布図 自作

図10 西賀茂群氷室状大型穴実測図

北田栄造 『京都市の文化財-京都市指定・登録文化財-』第12集 28頁 京都市文化観光局文化部 1994年 一部改編

表 引用文献 (記入以外は自作)

表1 天理市福住町氷室状大型穴一覧表

川村和正「天理市福住町の氷室状大型穴踏査レポート」『かしこうけん友史』第3号 32頁 1996年 一部改編

表2 都祁村各種氷室遺構一覧表

川村和正「都祁村蘭生の氷室状型穴の発見」『冷凍』第75巻第872号 61頁 2000年、一部改編

表3 菟田野町町松井氷室状大型穴一覧表 自作

表4 西賀茂群氷室状大型穴一覧表

北田栄造「氷室七景-京都市西賀茂の栗栖野氷室-」『古代文化』第48巻第3号 48頁 1996年 一部加筆

正誤表

頁	種別	行	誤	正
251	要旨	1	古来、都祁といえは日本書紀仁徳天皇62年条の	古来、都祁といえは『日本書紀』仁徳天皇62年条の
251	〃	5	氷室跡とおぼしい各種氷室遺構	氷室跡とおぼしい各種推定氷室遺構
251	本文	9	各種氷室遺構が報告されだした。	各種推定氷室遺構が報告されだした。
251	〃	10	都祁地域の各種氷室遺構を中心に	都祁地域の各種推定氷室遺構を中心に
252	〃	8	2、都祁地域の各種氷室遺構について	2、都祁地域の各種推定氷室遺構について
257	〃	10	5、古代氷室史料と都祁地域の各種氷室遺構との関係検討	5、古代氷室史料と都祁地域の各種推定氷室遺構との関係検討
256	図9		スケール 1500m(下段図9参照)	スケール 500m(下段図9参照)

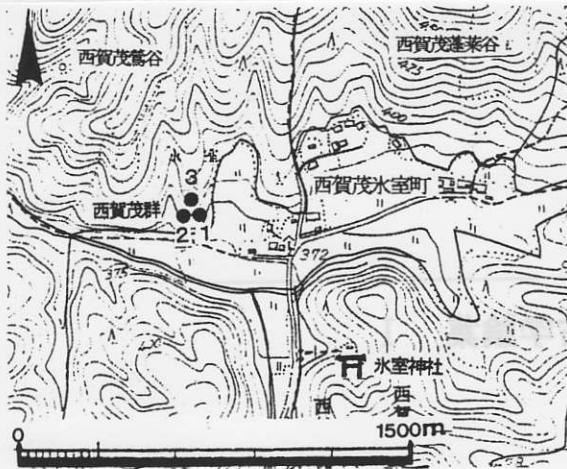


図9 京都市西賀茂町氷室関係史跡分布図

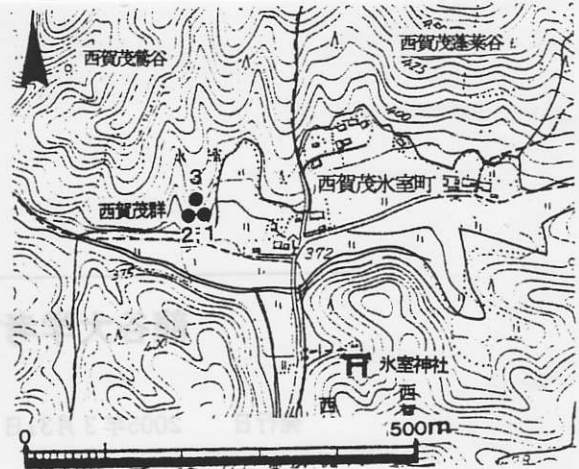


図9 京都市西賀茂町氷室関係史跡分布図

龍谷大学考古学論集 I

発行日 2005年3月31日

発行者 龍谷大学考古学論集刊行会

〒600-8268 京都市下京区七条大宮東入ル

龍谷大学文学部考古学研究室気付

印刷 有限会社 新進堂印刷所

本稿は掲載誌発行人(龍谷大学考古学論集会)の許可を得て掲載しているものであり、
本稿に含む文章テキスト、図表の転載・引用等については著作権者である著者の許可
を受けない限り禁止します。